

論大会に出場した。全国大会では、北部日本地区代表決定で選抜され、代表二十七名による決勝大会に出場した。K君は、小学校の低学年頃から視力が低下しはじめ、中学校入学後は極度に悪化し、ルーペを使って一字一字拾い読みしなければならないほどになってしまった。今であれば、拡大コピー機を利用してもっとよい指導ができたであろうと考えると残念である。

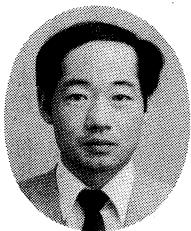
昭和五十六年は国際障害者年の年であり、K君の演題「障害者として」は時の話題であつたために、Aテレビの四日間の取材を受け、某番組で放映された。私自身も何度もテレビカメラを向けられ、緊張したことがつい昨日のことのように脳裏に浮かんでくる。

K君と英語弁論大会で一緒に出かけた日数は延べ八日くらいになる。その間、教師と生徒というよりは、人生の友人としての話を多くしたように思う。お互いに話し合える人間関係が、お互いの知力を伸ばす、ということが心理学関係の本に書かれてあつたが、私自身、生徒と共に育つという意味での共育を体験したと思っている。当時の私の学年通信「たんぽぽ」には、奥川中学校での私の大切な思い出がいっぱいつまっている。将来、教え子と集まる機会には、忘れかけた「たんぽぽ」が花開き楽しい対話が生まれるであろうと期待している。

私が現在担任している学年は、一年からの持ち上がりの学年一学級の三年生である。三年間四十五名（二学期から四十六名）の大規模学級である。私の学年には「あすなろ」という保護者の命名した学年通称がある。号数は延べ百十号を越える。教師と保護者と生徒の共育と育成（自分を育てる）日誌として大切にしたいと考えている。（磐梯町立磐梯中学校教諭）

## 視野を広げて

斎藤宏也



れたことまでが、急に分かる努力をしなければならない立場に立たされた苦痛。教えるのに分かつてくれないことへのあせり。もし、教員になつていなかつたら、もつと気軽にいろいろ好きなことを学べたものを、との思いは今も残っています。

一旦教員になつてしまふと、好きな教科はともかくとして、「教えなければならないから学ぶ」という受身的な

「学ぶ」がたくさんでてくるのには困りました。全ての教科に興味を持つてゐる訳ではないし、さりとて今すぐ全ての教科に興味を持てる訳でもない。

なんとかこの受身的な「学ぶ」から脱却しようと試みましたが、なかなかうまくいくものではありません。最後まで残つたのが音楽、そして絵画の指導です。教えていた義務感から、よく分からぬいくせにオーケストラを聴きに行つたり、絵を見に行つたりするのですが、もともと蓄積されたものが何もないのですから、たまたま聴いたり見たりしただけでは分かるはずもありません。ところが、うれしいことに、状況が最近少し変わりつつあります。絵について言えば、少し何かがわかりかけてきたのです。そのきっかけは次の文でした。

『新しいものを求める気持ちと、それを受け入れる心の広さがあれば、それでも絵を理解することができます。最も困るのは「私はわからない」』

（伊達町立東小学校教諭）

「朝な夕なに仰ぎ見る靈峰これぞ磐

梯山……」とは、私の現任教員である磐梯町立磐梯中学校の校歌である。磐梯町は、会津文化の發祥の地恵日寺の整備と社会教育施設の整備が進む歴史の町である。

と自ら否定してしまう弱い心です。作品についての解説を聞いたりして、絵を理解したように思つてゐる人がいますが、それはまちがつています。それは解説者の見方がわかつただけであり、自分の見方や理解ができたことではないからです。……大切なのは、人はどう思おうと、自分が良いと思う作品に、何ものにもわずらわされることなく対話することです』（Y新聞の文化欄より）

これを読んだとき、なぜ私が絵に親しみなかつたか、やつと気がつきました。今まで、分からなければならぬといいう職業意識が先だつて、（高い値段がついているような絵は尚更）自分なりの感覚や心で対象を受けとめる、